

9月19日は敬老の日

希望と胸の高鳴りの幸齢化社会深谷

巻頭特集

9月第3月曜は敬老の日。深谷市も高齢者人口は4万人を超え、高齢化率28.7%、市民4人に1人が高齢者だ。「人生100年時代」の「生涯現役社会」。渋沢栄一言「四十、五十は渾垂れ小僧…」を地で行く深谷の元気なシニア何人かに話をきいた。

担当は議員ライター・小林真。(団体名などは通称です)



深谷市「深活フリー素材」より

「20歳くらいから、頭ん中は変わってないなあ。それが、出会っちゃったんだよね、映画に」

1948(昭和23)年生まれ、団塊と真ん中の深谷シネマ館長竹石研二さん。「町に映画館を」という夢を日本初のNPOによる運営で実現させた身近な伝説の主人公であり、世代の人気ラジオ番組NHK「ラジオ深夜便」でレギュラーコーナーを持っていったように知名度は全国区だ。

「20歳の頃、墨田区で日曜定休の店を借りてフォークソング喫茶をやったら、近くの女子寮なんかから若い子がいっぱい来て。町でおもしろいことをやると、人が集まって楽しくなるって知ったんです」

横浜放送映画専門学院1期生の映画好きが、50歳でNPO設立へ。市のTMO*1や空き店舗活用と結びつき、2002年に閉店銀行跡に常設館を開設する。2010年



シネマで撮影も行われた『シュシュの娘』ツイッターより、出演女優金谷真由美さんと

には区画整理で多くの反対を押し切って現在の七ツ梅酒造跡に移転。以降、東日本大震災、デジタル化、コロナ禍と試練は続いたが、それぞれ原発テーマ作のヒット、プログラムの多様化、ミニシアター支援の地元入江悠監督『シュシュの娘』*2という副産物を産んでいる。

「そう小林さん、今度、NPOとまち遣い、商店街や自治会で七ツ梅の今後を市長に要望することになったんだよね。それと10月からの労働者協同組合法、ばくもひとつつくりろうと思ってるさ…」

福山美和子さんが、深谷シネマのある七ツ梅酒造跡に隣接する民家をリノベートして「フクフル食堂」を開業したのはコロナ禍直前の2020年1月。それまでは(特非)ワーカースポーツが運営する「どう工房」で約20年間、どうふの製造・販売に携わった。

「どう工房で始めた惣菜やお弁当を、お店で出すことならわたしにもできるって。プロの味は出せないし、お母さんの手づくり料理が基本。買い物に行ったら食材をみて次の日のメ



▲8月10日のランチ「鶏の南蛮漬け」。どう工房時代の経験、つながりが生きている

▲食堂廊下での福山さん。撮影は本誌「キラッとさん」担当すがた

ニューを決める。ほぼ全員シニアでもともと私の知り合いばかりのスタッフで楽しく仕事してます」

「いちばんは、何でも自分で決められる楽しさですね」

2年前、定年退職を機に起業した松本博之さん。前職ぶぎん地域経済研究所で磨いたリサーチ力と、現役時代からNPO「深谷にぎわい工房」で15年続けたまちづくり活動を併せて展開する「メイストリート・プログラム・リサーチ(同)」だ。

フォロワーするのが理想だ。

「人生100年時代。シニア婚活は深谷でも静かに盛り上がりつつあります。ただ、裕福な上にスマホなどの情報の扱いはイマイチな世代。資産目的の詐欺めいた手口が増えています。婚活の方法は考えて、人生の後半戦をよきものにしてほしいですね」(東方町のやがみブライダルルームカウンセラー・矢神勝彦さん「本誌『深谷の町名の由来』担当ライター」)

「人が何かを学ぶには胸の高鳴りが必要」(映画『ベルファスト』より)

8月8日月曜、シネマでみた監督ケネス・ブラナー幼少期1969年の北アイルランド紛争の体験を描いた作品。竹石さんに高齢者の結婚と恋愛に関する意見をきいているうち、「じめんね、上映始まるから」となったが映画のセリフがこたえをプラスしてくれた。

高齢化の問題は、自身でも周囲

でも誰もが直面する。わたしも90歳の父親が昨年要介護1となり、自身も「プレシニア」と称させる60歳手前だ。「この前、何かで読んだんだけど高齢期じゃなくて幸齢期だって」とは、ご自身その通り生きる竹石さん言。この日のシネマは翌日の『野火』の塚本晋也監督次作のセット設置もあって、知った同世代や竹石さんを訪ねてきた若い世代に何人も会った。こんな人たちがいつしよに一年にひとつずつとる歳は、希望を持って胸が高鳴る幸齢化社会だ。



産経新聞の渋沢連載も好評。市外の渋沢、畠山講演も多い松本さんは、多くのグッズ、書物を集める野球、大リーグファンで、その方面での活躍も期待される

「かつての同僚ですか？継続雇用が多いですよ。セカンドライフっていわれますけど、自分で起業したりする人は現役時代によくいう『一枚目の名刺』、会社以外の場を持ってましたね」

メ社は先駆的なワークキングスベースとしても知られる大宮「7F」にオフィスを持つ。「竹石さんがなんで深谷でやらないのって？やっぱり現役時代のネットワークがあって人口も多い大宮の方でと。」

でも、自宅、コロナで休止状態を復活させたいNPOもある深谷との距離もちょうどいい二拠点ライフに意外な効果があるかな、とも思ってるんですね

◆「希望になるんですよ」

赤十字奉仕団代表・吉田光枝さん



▲ボランティア・市民活動サポートセンターで吉田さん。10代から続ける算盤の先生は現役だ

▲吉田さんの「かんたん方法」の藍染。生の葉をそのまま擦って着色するので葉脈もはつきりみえる



※1 タウンマネジメント機関(Town Management Organization, TMO)。中心市街地における商業まちづくりのマネジメントを行う。事務局は商工会議所
※2 2011年は「ミツバチの羽音と地球の回転」「100,000年後の安全」「チェルノブイリ・ハート」など日作含む関連作を上映/従来のフィルム配給からデジタル化した「2013年問題」で全国で導入できない多くの映画館が廃業したが深谷シネマは商店街の「コミュニティ再生補助事業」として導入。以降、一日に複数のプログラムを上映するようになった/ミニシアター支援の目的でクラウドファンディングで資金を調達。深谷周辺で撮影された
※3 深谷市高齢者福祉計画より2020年のデータ。「ひとり暮らし・夫婦2人暮らし」の数字はアンケート回答者の割合。同計画 pdf はこちら▶

一軒ずつポスティングする「地域みっちゃく生活情報誌」は、同じ人が同じエリアに配布するマンスリーフリーマガジンです。一人暮らしのお年寄りのお家の見守り隊としても機能させたいと考えています。

【取材・文】小林真(こばやしまこと) 1963年深谷市上増田出身・在住。塾経営者、編集/ライターから深谷・ゆめ☆たまご風土飲食研究会、本庄・NINOKURAなどで活動。2017年からNPOくまがや理事として熊谷市市民活動支援センター所長、2022年1月の補欠選挙で深谷市市議会議員に。